

本報告の目的は、大戦間期、主に 1920～30 年代のアメリカの消費や生活水準に関する研究がどのような特色を持っていたのか明らかにし、それらの経済学と家政学という二つのフィールドにおける位置付けを行なうことである。

◎背景：

19 世紀を通じてアメリカでは、人口増加、企業の繁栄、所得の増進、生活レベルの向上が起こり、消費者の購買力は、生産力の発達にも関わらず、その生産力を追い越していた。そして、20 世紀初頭の企業経営者にとって問題となったのは、もはや生産についての事柄ではなく販売についてであった。つまり、彼らは、生産過剰のため消費者の需要を喚起する必要があるという観点から、消費についての関心を向けることとなったのである。それ以前には、需要喚起の手段として広告がさかんに用いられたが、それだけでは十分な結果が得られなくなり、合理的な市場探査 (market survey) や市場分析 (market analysis) の仕事が重要になっていった。このような事情から、消費者の購買動機、購買習慣などに関する調査、消費者需要に関する研究が盛んに行なわれるようになった。

また、20 世紀初頭は、ヨーロッパからの輸入ではないアメリカ独自の研究が展開しはじめた時期でもある。これは、ヴェブレン (T. Veblen) の *The Theory of Leisure Class* (1899) が発刊された頃とも重なる。この頃から様々な文化的経済的集団における支出形態の研究が行われるようになり、その先駆となったものにパッテン (Simon Nelson Patten, 1852-1922) の *The Consumption of Wealth* (1889)、*The theory of dynamic economics* (1892) などの著作がある。

アメリカにおいて、消費に関する理論が開花期をむかえたのは 1920 年代、まさに大戦間期であるといえる。この時期アメリカは、所得の増加に比例するように人びとの暮らしを形作る消費財が増加した時代でもある。生産者たち、すなわち企業は、消費拡大のためにさまざまな方策を練り、消費者の目の前には華々しい広告が氾濫した。その流れの中で、消費者はますます消費へと駆り立てられる図式が出来上がっていったのである。

1. 消費経済学：

ドーフマンは、この時期、経済学の特殊領域として消費経済学 Consumption Economics が出現したと述べている。彼によれば、この時期の消費を論じた発展的著作の多くは、制度学派や、根本的な部分で彼らに負うところがあると認めた人々によって生みだされたという¹。そこで示されているのが、以下で紹介する Hazel Kyrk、Jessica B. Peixotto、Theresa Schmid McMahon という三名の女性経済学者たちである。

◎ヘーゼル・カーク (Hazel Kyrk:1886-1957)

ヘーゼル・カークは、シカゴ大学において学位を取得した女性経済学者である。学位論文は、“The Consumer’s Guidance of Economic Activity”であり、これは、第 35 回 Hart, Schaffner, and Marx prize で一位となり、\$1,000 の賞金を獲得するとともに出版の機会を与えられた。これが、1923 年に出版された *A Theory of Consumption* である。彼女

¹ Joseph Dorfman, *The Economic Mind in American Civilization : Volumes Four and Five 1918-1933*, New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1969(1959), p. 572

は1925年3月にシカゴ大学の職を得た後²、1938-1941年の夏、アメリカ農務省の家政学局（the Bureau of Home Economics of the US Department of Agriculture）の主席エコノミストとして、後に消費者物価指数を定める基準年度価格の設定に用いられる事となった大規模な家計支出調査を担当した。第二次大戦中は価格管理局（The Office of Price Administration）で仕事をし、1945-46年には、戦後のインフレに影響を与えた消費者物価指数の改定に関して連邦政府にアドバイスを与える専門委員会の議長を務めた。この後、カークは、1952年までシカゴ大学の経済学部および家政学部で教鞭をとり、1957年8月、避暑地であったバーモント州ウェスト・デンバーで亡くなった³。

「消費研究の性質とその範囲」とした一章から始まる *A Theory of Consumption* では、消費者の選択の自由と、生産に関わるさまざまな要素との関係が論じられている。彼女は、そのなかでも、消費者の評価プロセスに焦点を絞り、スタンダードな消費とは何か、スタンダードな生活とはどのようなものかについて考察する。それは、消費者による選択、つまり、消費行動は価値の評価プロセスの繰り返しとして描かれ、それによって成り立つ生活である。その蓄積が、生活水準（生活基準）に変化を生じさせるのである。

カークが目指したのは既存の経済学とは異なる、消費＝選択＝人間行動という図式のもとで消費者を主体とした「適切な消費の理論」を提示することだった。それは、消費者の位置（place）と機能を示すものであり、「時代と場合を考慮した消費論」でもある。

カークは、既存の経済学が消費を次のように取り上げてきたと考えていた。つまり、彼女は消費が完全に無視されてきたとは考えていない。イギリス古典派は、生産、交換、分配と同様、消費について注意を向けていたとしている、それは、彼女が問題とする「消費の主体」に対する関心ではなかった。また、彼女は、イギリス古典派の議論が、「増加する生産の問題に関する先入観や、消費のプロセスが含んでいるものについての限定的な見解のために」消費の「主体」を無視したととらえている⁴。

他方、限界効用学派では、形式的に選択の自由を持つ消費者が扱われているとしている。しかし、そこで問題の中心となっているのは、産業メカニズムにおいてそれがどう機能するかということや、消費者は個人や家計のニーズを体現する購買者でしかなく、それは、主に市場の問題を論じる際に登場するのであった。しかし、カークは次のように述べ、このような消費者の扱い方を採用しない。「市場という観点から重要とされるのは、消費プロセス全体の終着点であって、個々の消費者は、彼が選択における力を実践しようとする際、困難に直面している。このような分析のみでは、消費の完璧な理論にはたどり着くことはできない⁵」。以上が、彼女が既存の経済学に見た消費論である。

カークはここから進んで、「消費者の選択は価格レベルや利幅に影響を与えるという点で力を持つようになる」ということを示し、受動的ではない消費者、生産を規定するものとしての消費者像を提示した。そして、消費者の関心（interest）が「独占、不正行為、粗悪品そして利潤を追求する生産者のより狡猾な策略によって、転覆され

² 当初は、家政学の associate professor として雇われていたが、1929-30年に、経済学部のメンバーとして公式に記載されはじめた。(Folbre, Nancy. The “Sphere of Women” in Early-Twentieth-Century Economics. From *Gender and American Social Science: the formative years*. Edited by Helen Silverberg. Princeton: Princeton University Press. 1998. p. 47)

³ Edited by Dimand, Robert W., Dimand, Mary Ann, Forget, Evelyn L., *A Biographical Dictionary of Women Economist*, Edward Elgar, 2000. pp.251-253

⁴ Kyrk, Hazel, *A Theory of Consumption*, Arno Press, 1923(1976). p.19

⁵ *ibid.*, pp. 130-131

挫折させられる可能性」があることを考慮し、「消費の適切な理論」は、独占、不正行為、粗悪品、生産者の狡猾な策略に対する実践的な諸条件を認識させるためのものであった。

最も重要なのは、カークが「このような消費の理論は、消費の顕著な側面、すなわち、生活水準というものの周辺に打ち立てられるもの」として取り上げている点である。彼女の示した消費の適切な理論は、「どのようにこれらの基準が出来上がるかを説明」し、「それが構成されるプロセス」を示した。そして、「それらの基準の構成要素を分析」し、それが発展し変化する状況を描き出した。そこでの主役を、家計を管理する存在、つまり、消費＝選択を行なう主体である「女性」とし、その役割を強調した。そして、賢い消費 wise consumption の実践、すなわち、消費者および消費の質的向上の必要性を論じたのが彼女の消費論の最大の特長といえる。それは、現実の消費生活の視点を経済学批判の足場とし、オリジナルな消費経済学を提示する試みであった。さらに、消費者主体という人間像を女性として具体化することで、経済学に性別を持ち込んだという意味でも斬新な発想であったと思われる。そして、彼女自身はあくまでも経済学の問題として消費を論じたが、経済学部と家政学部における彼女の教育から、経済学と家政学との発展を促すきっかけとなったのであった。

◎ジェシカ・ペイショット (Jessica B. Peixotto:1864-1941)

ジェシカ・ペイショットは、ニューヨークで生まれ数年後にサンフランシスコへ移った。1880年、父親には反対されカリフォルニア大学バークレー校への入学を断念。後の1891年、27歳でバークレー校の聴講生となり本格的に学習を始め、1894年にPh. B課程を修了。翌年からDepartment of Political Scienceの大学院に進み、この頃から、経済学に興味を持ち初めたが、学部時代は経済学については二つの単位を取得しただけだった。1886～87年にはソルボンヌで博士論文のための調査を行なった。1900年、カリフォルニア大学で二人目の女性博士号取得者となった。博士論文は、A Comparative Study of the Principles of the French Revolution and the Doctrines of Modern French Socialismで、1901年に、*The French Revolution and Modern French Socialism*として出版された。

1904年バークレーの社会学の講義を受け持つようになり、1907年には経済学部の一員となった。最初はAssistant Professor of Sociologyとして、後に、Assistant Professor of Social Economicsの職に就いた。1918年、女性で初のFull Professorとなり、1935年に引退した。彼女は、28年間バークレーの経済学部で教鞭をとったが、同時に、この学部で博士号を取得した初めての女性であり、職を得た初めての女性であり、正教授となった初めての女性であった⁶。

Getting and Spending at the Professional Standard of Living (1927)⁷では、カリフォルニア大学の96人の教職員とその家族（現代の用語でいうところの“消費の単位 (spending units)”）を実例として取り上げた。また、論文“*How Workers Spend a Living Wage* (1929)”では、サンフランシスコにいる82人の活版技術者 (typographers) の家族を取り上げた。彼女は、分析の際、それぞれの収入レベルにおいて、重要度が増してきていると思われるようなものに対する支出も項目に含めていた。（たとえば、投資、保険、自動車、健康、娯楽など）彼女は、さまざまな職業の集団、社会的集団二対する詳細な調査や、所得別の調査の結果として、支出は、標準化する (become standardized) 傾向があるとした。

⁶ *A Biographical Dictionary of Women Economists*, pp.328-330

⁷ Peixotto, Jessica B., *Getting and Spending at the Professional Standard of Living*, New York: Arno Press, 1927(1976).

たとえば、大学職員の家族は、最も合理的に支出することが予測されたが、おおよそ支配的な所得階層のパターンに則ったものだった。大学教授たちは、「一般的に、消費者のタイプとして‘最も高い’階層に位置し、個々のそして、集団の選択において、彼は、各選択肢とそれが選択される理由を承知し、その選択を行なう主体としての消費者である」。しかし、現在の大学教授の暮らし方 (ways of living) は、全世界標準 (the standards of the world-at-large) に向かう傾向があるという。つまり、「‘学問の’世界は、これまで比較的孤立していたが、我々全てが接している生活水準のいわゆる‘上昇’傾向に直面」しており、平均的な教職員は、「現代の庶民の生活の‘基準となるような’生活様式に影響を与えるあらゆるメンバーから同じ影響を受ける」としている。そして、全体の傾向として、アメリカの生活水準の本質的特徴は、「諸個人や家族ごとの欲求 (wants) の規模が、量、種類、強度のどれにおいても増加しなければならない、増加すべきであるということに対する、熱狂的な信念」であるとし、「そのような欲求の拡張と変化が、永遠の幸福と一般大衆の快適な暮らし (general well-being) の増加」へとつながっているとした。

◎テレサ・マクマホン (Theresa Schmid McMahon:1878-1961)

テレサ・マクマホン⁸は、シアトルの郊外レイク・ワシントンの真ん中に浮かぶ、マーサーアイランド (Mercer Island) で育った。1907年に、ウィスコンシン大学で社会学 (ウィスコンシンでは、経済学と社会学は一つの学部になっていた) の博士号を取得した。博士論文は、1912年に出版された *Women and Economic Evolution* である。当時の研究仲間には John R. Commons がおり、Charlotte Perkins Gilman の著作から影響を受けていた。彼女が教えた学生の中には、George Stigler がいる⁹。

マクマホンは、*Social and Economic Standard of Living* (1925)¹⁰において、ヴェブレンが唱えた人間の見栄の性向 (emulatory propensity of man) を出発点として論じている。そして、賃銀上昇期における労働者達の模倣行動にとりわけ注目し、彼らの考え方 (point of view) は、いわゆる、財産家 (propertied-man) の考えになってきており、社会的諸階層は、その階層で生まれた個性よりむしろ、一歩先にある階層の個性を取り入れる傾向を持っているとした。そして、“社会的生活水準の民主化”の発展が、政治的な民主化と産業の民主化によって成立するという見方を疑問視した。つまり、政治的民主化と産業の民主化は成し遂げられるものの、社会民主主義 (a social democracy) の実現は、新たな社会的価値の諸基準 (new standards of social valuation) によって、事実上くじかれてしまうのである。

以上、3名の「消費経済学」は、経済学の範疇で消費とそれによって成り立つ生活水準を研究したものであるが、これらは社会学や心理学などを取り入れることに積極的であった。それは、当時の既存の経済学の知識からは解決し得ない要素が消費を分析する上では必要だったからではないか。そして、その研究方法は、経済学の中に消費論を位置づけようとしたもの (カーク) から、実質的データを元に人々の暮らしの様子を消費の観点から描き出そうとしたもの (ペイショット) などさまざまであった。つまり、消費の研究は、経済学と他の分野とを折衷することによって成り立つものを見ることができる。その意味で、消費研究は、消費という“経済”活動を扱いながらも、経済学の問題としてストレートに取り扱うことが難しいということではないだろう

⁸ マクマホンが1911~1937年まで所属していた University of Washington には、彼女と彼女の夫で歴史学の教授であった Edward McMahon (1908~1940年まで所属) の二人を記念して名付けられた学生寮=McMahon Hall が現存している。(Norman Johnston, *The Campus Guide: University of Washington*, Princeton Architectural Press, 2001. pp.83-84)

⁹ *A Biographical Dictionary of Women Economists*. pp. 304-306

¹⁰ McMahon, Theresa S., *Social and Economic Standards of Living*. Boston: D.C. Heath, 1925.

うか。

2. 家政学：

◎アメリカ家政学の成立まで：

アメリカ家政学がその科学化によって、家政学が大学レベルの水準にまで高められ、体系化されることに大きく貢献したのは家政学運動と呼ばれる動きであった。

家政学運動およびアメリカ家政学の誕生にとって、欠かすことのできない人物は、キャサリン・ビーチャー¹¹ (Catharine Esther Beecher) と、エレン・リチャーズ¹² (Ellen H. Richards) である。彼女たちの尽力によって、家政学は、レイク・ブラシッド会議¹³ (1899-1907年) を契機として体系化が進んだ。

その前段階として、1870年頃には、大学が家政学コースを設ける動きが盛んであったが、その理由の一つは、女性が大学に入学するのは母親になるための教育¹⁴を受けるため、という考えが広まったことがあげられる。

◎家政学=Home Economics の意味：

家政学の体系化が進むなかで、家政学のコースの名称や内容を統一する必要があった。したがって、レイク・ブラシッド会議は、まず、名称の選択についての議論から始まった。それは、家政学が自身を定義するために最も重要な仕事であったといえる。討論の末に選択された、1. 家政学 (Home Economics) のほか、2. 家事技芸

(Household Arts)、3. 家事経済 (Domestic Economy)、4. 家事科学 (Domestic Science) が候補であり、それぞれ異なる目標や強調点を示しており、それぞれに擁護者がいた。2は、料理と裁縫のような手工教育、3はビーチャーの主著*A Treatise on Domestic Economy*を採用したもので、主婦と使用人との問題に焦点を当てていた。4は、栄養と衛生を強調したもので、リチャーズは当初この語の採用を薦めていた。そして1は、新興の社会科学の知識を取り入れ、家庭を社会的に位置づけようとしたものであり、これが採用されたのは、女性の伝統的領域としての家庭の概念を新しい社会科学の特徴と適切に結び付けることができるという意味で、初期の家政学運動を構成した多様な流れを含みうるものだったからであろう¹⁵。

◎「消費者教育」と家政学：

この流れの中で、「消費者教育 (consumer education)」は、ヘンリー・ハラップの

¹¹ 1841年に*A Treatise on Domestic Economy*を出版。ヴィクトリア朝風の家庭生活 (domesticity) の概念を擁護する立場から、女子に対する学校教育を推進した。この著書は、家政学を教授する体系を構成したもので、女性に妻や母親としての専門的な職業を教えるために、一般科学を基礎としたリベラル・アーツ、つまり、家政学のフォーマルな教育を提唱したものである。

¹² アメリカで大学教育をうけた最初の世代の一人。同時代の高度な教育を受けた女性たちの要求を満たすために家政学の確立に尽力した。1911年に亡くなるまで、運動の指導者であり、中心的な戦略家であった。主著は、*The Chemistry of Cooking and Cleaning*(1880)および、*Food Materials and Their Adulterations*(1885)であり、その他に家政学関連の教科書的な著作がある。(Stage, Sarah and Vincenti, Virginia B., *Rethinking Home Economics: Women and the History of A Profession*, Cornell University Press, 1997. (『家政学再考——アメリカ合衆国における女性と専門職の歴史——』倉元綾子監訳、近代文芸社、2002. p. 42)

¹³ この会議の立役者の一人、メルヴィル・デューイ (Melvil Dewey) は、図書館学者であり、十進分類法の考案者として著名だが、ニューヨーク州の州立図書館長および家庭教育主事も勤めた。

¹⁴ 料理・裁縫・衣服・洗濯・住居・家庭衛生・看護などからの選択制が取られており、限定されたコースだった(今井光映 編著『アメリカ家政学前史』光生館 1992. p. 14)。

¹⁵ 今井光映・紀嘉子共著『アメリカ家政学史 リチャーズとレイク・ブラシッド会議』光生館 1990. pp.60-61、および、『家政学再考』序章を参照。

『消費者教育』(1924)¹⁶ が出版された時期以降、とりわけ 30 年代に入ってから家政学において盛んになったトピックである。ハラップの著作は、経済学の知識のみならず、様々な統計資料を元に「どういうものを選ぶべきか」ということを示したものである。消費者教育に関する家政学の関心は次のようにまとめる事ができる。

『20 世紀のアメリカ家政学研究』(2007) は、1909 年から 2000 年までのアメリカ家政学会誌に掲載された論文を 10 領域に分類し、各領域の年代別特徴の分析などを、時系列に基づいて量的・質的に分析したものである。消費経済学の分野に関連すると思われる「家庭経済学」および「消費者問題・消費者教育」の 1920～30 年代のデータは以下の通りである。

| | |
|---------------|----------------------------|
| 「家庭経済学」 | 1920 年代：6.3%、1930 年代：11.5% |
| 「消費者問題・消費者教育」 | 1920 年代：7.5%、1930 年代：11.2% |

いずれの分野も、20 年代から 30 年代にかけて増加している。上記の分類方法が妥当なものかという問題はあるが、消費者 (consumer) をキーワードとした論文がこの時代増加したというデータは注目に値する。これは、1920 年代に登場し、1940 年代に多く使用されたし、「購買 (buying)」は、1920～40 年代を中心に出現しており、「消費者教育の内容が、この当時は買い物上手な消費者を育成する」方向に向いていたことがうかがえる。また、アメリカ家政学会の年次大会テーマをみると、1934 年が「新しい経済秩序における消費者 (The consumer in the New Economic World)」となっており、「消費者」という言葉がはじめて登場している¹⁷。

以上のように、他学問の知識を積極的に取り入れ体系化を測ろうとした家政学において、消費や生活水準に関わる研究および消費者教育の分野は、もともと経済学と関わりがある分野とも言える。しかしながら、それは、消費や生活水準を研究するというよりむしろ、その知識を用いた実践的な内容を教育すること、すなわち、消費者「教育」の側面が強かったと言えるだろう。

3. おわりに

まとめると、経済学も家政学も、生活水準と消費の研究は、生活を改善するための指針を示すことが目的であったと言える。家政学は、経済学の知識から「賢い消費」(カーク)や「快適な暮らし」(パイショット)の基準を量り、消費の実践的担い手を導くべく発展した側面がある。また、経済学は、消費を既存の経済学とは異なる視点からとりあげ、他分野の知識を応用して分析し、論じたことによって、成果を残したと言えるのではないだろうか。

¹⁶ Harap, Henry, *The education of the consumer : a study in curriculum material*, New York : Macmillan, 1924.

¹⁷ アメリカ家政学研究会『20 世紀のアメリカ家政学研究』家政教育社 2007.